

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	楠本 和彦（和歌山県）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	甲第 1 4 号
学位授与の日付	平成 2 8 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	箱庭制作者の主観的体験に対して多元的方法を用いた質的研究 —M-G T A による促進機能に関する理論生成と単一事例質的研究による系列的理解を中心に—
論 文 審 査 委 員	主査 石原 宏（佛教大学准教授） 副査 鈴木 康広（佛教大学教授） 副査 岡田 康伸（京都大学名誉教授）

〔 1 〕 論文の概要

本論文は、箱庭療法が心理療法の技法として治療的に働く機序を明らかにすることを目的とした基礎的研究と位置付けられる。これまでも、箱庭療法の治療機序の解明に向けて、箱庭制作過程で何が起きているのかを明らかにしようとする研究は行われているが（伊藤 2005, 近田・清水 2006, 石原 2008, 上田 2012, 花形 2012, 朝比奈 2013 など）、その多くは、一回限りの箱庭制作過程の分析に限定した研究であったり、箱庭制作過程に働く多種多様な要因に統制を加えて制作過程をいくつかの限定的な側面から分析する研究であったりして、継続的な箱庭制作の全体像を明らかにするには至っていないという課題があった。本論文は、その課題を乗り越えるべく、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作過程を可能な限り要因の限定を行わず分析するとともに、箱庭制作面接が継続していくこと自体がもつ効果をも明らかにしようとするものである。具体的には、著者のもとで自己理解のために箱庭制作調査への参加を希望した A 氏（40 代・女性）と心理療法家の教育分析として箱庭制作調査への参加を希望した B 氏（40 代・男性）の 2 名の箱庭制作面接（A 氏は 10 回、B 氏は 8 回実施）を分析データとし、第 1 研究と第 2 研究として、2 つの方向から質的分析が行われている。

第 1 研究の目的は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を精緻に分析し、概念化することを通して、箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己成長をどの

ように促進するのか、その機能を検討することである。なかでも、個々の箱庭制作過程がもつ促進機能と、箱庭制作面接が継続されるときに継続性・連続性がもたらす促進機能が分析の焦点であり、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下，2003．以下、M-GTA と略記）による理論生成が目指されている。

第2研究の目的は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することであり、質的データの分析と従来の事例研究の手法を混合した質的研究による系列的理解が目指されている。

本論文は、13章からなる。内容は以下の通りである。

I 章 本研究全体の問題および目的

第1研究 M-GTA による箱庭制作面接の促進機能に関する研究

II 章 問題および目的

III 章 方法

IV 章 第1研究の結果の概要

V 章 M-GTA のコアカテゴリー①【内界と装置の交流】の結果および考察

VI 章 M-GTA のコアカテゴリー②【内界と構成の交流】の結果および考察

VII 章 M-GTA のコアカテゴリー④【内界と装置と構成の交流】の結果および考察

VIII 章 M-GTA のコアカテゴリー⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】および⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の結果および考察

第2研究 質的研究による系列的理解

IX 章 問題および目的

X 章 方法

X I 章 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 一箱庭制作者 A 氏一

X II 章 箱庭制作面接の質的研究による系列的理解 一箱庭制作者 B 氏一

X III 章 総合考察

第I章では、第1研究、第2研究に共通した観点から、箱庭療法の基礎的研究としての質的研究のレビューが行われ、継続的な箱庭制作面接に関する質的研究の意義と必要性が検討された上で、上述の第1研究、第2研究それぞれの研究目的が明示されている。

第II章から第VIII章までが第1研究である。第II章では、箱庭制作過程における箱庭制作者の主観的体験を扱った調査研究のレビューが行われ、箱庭療法研究の基礎的研究とM-GTAの適合性が検討されている。第III章では、第1研究、第2研究に共通する調査対象者と調査方法が述べられている。2名の調査協力者（A氏、B氏）が箱庭制作者となり、箱庭制作面接（箱庭制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程からなり、VTR録画された）とVTRに基づく内省報告の作成およびふりかえり面接（ICレコーダーで録音）を約2週間おきに繰り返す方法でのデータ収集が、A氏は各10回、B氏は各8回行われ、最後に全過程をふりかえる面接（ICレコーダーで録音）が行われた。すべての面接終了後、著者が、VTRに基づき箱庭制作面接の自発的説明過程と調査的説明過程およびふりかえり面接での会話を逐語録化して、箱庭制作者の語りの内容を、箱庭制作過程の時系列にそって再

構成した一覧表を作成し、分析の基礎資料としたことが述べられている。第1研究では、この基礎資料に対し、分析テーマを「継続的な箱庭制作面接における促進機能」、分析焦点者を「自己理解、自己成長を目的として、継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」と設定して M-GTA によって、データに密着した理論生成を目指すことが示された。

第IV章は、上記の M-GTA による分析の結果が概説されている。結果図として、「箱庭制作面接の促進要因間の交流」が提示され、箱庭制作面接において制作者の自己理解・自己成長を促進する要因は、各要因が単独で機能するのではなく、それぞれの促進要因同士が『交流』する過程でこそ機能することが明らかになったと論じ、「内界」「装置」「構成」「制作過程」「作品」「単一回の制作過程・作品」「説明過程」「見守り手」「作品の連続性や変化」「箱庭制作面接のプロセス」「外界・日常生活」「心や生き方の変化・成長」「内省」「制作者の生活・人生・環境」の14の促進要因が『交流』する12の局面（これを M-GTA におけるコアカテゴリーと位置付けている）について説明がなされている。

第V章から第VIII章が、M-GTA による分析結果の各論にあたる。促進要因が『交流』して促進機能として働く上記の12のコアカテゴリーのうちの「内界と装置の交流」（第V章）、「内界と構成の交流」（第VI章）、「内界と装置と構成の交流」（第VII章）、「単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流」（第VIII章）、「箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流」（第VIII章）の5つのコアカテゴリーに焦点が当てられ、各局面で自己理解・自己成長を促進する促進機能として概念化された35個の概念と7個のカテゴリーについて、A氏とB氏の箱庭制作面接から該当するデータ箇所が具体例として逐一提示され（4つの章で全142の具体例が提示されている）、データに基づいた詳細な考察が行われている。特に、第V章、第VI章、第VII章では、箱庭療法に特有のミニチュア玩具という「モノ」を使って砂箱へ何らかの表現を行うことが、いかにして「こころのこと」になっていくのかという問いについて、箱庭制作者の語りに基づき、「内界」と「装置」と「構成」の『交流』という観点からつぶさに論じている。また、第VIII章では、継続性・連続性の観点からの考察がなされている。

第IX章から第XII章までが第2研究である。第IX章で、M-GTA による分析はA氏とB氏から得られたデータを同列に扱って抽象しており、自己理解・自己成長を促進する機能を検討する上では有効であるが、A氏、B氏という個人のまとまりが保持されていないことが述べられ、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討するためには、第1研究を補完する形で、詳細な質的データに基づく系列的理解を目的とした第2研究が必要となることが述べられる。

第X章は、第2研究の方法が検討され、第1研究と同一の基礎資料に対し、今度は、各制作者の箱庭制作面接に表現されたテーマの系列的理解や面接の展開、その個人的意味について多層的・総合的に把握・分析することが述べられている。

第XI章と第XII章が、第2研究の結果にあたる。第XI章では、A氏の10回にわたる箱庭制作面接について、1)主なテーマと自己像の変遷、2)宗教性（命、守り、神聖な場所・生き物）、3)女性性、母性、4)自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容、5)受動性と能動性、面接内外での深い関与の5つの観点から考察がなされた。第XII章では、B氏の8回にわたる箱庭制作面接について、1)宗教性を中心とした心や生き方の変容、

2)心の多層性の2つの観点から考察がなされた。

第XⅢ章総合考察では、第1節で総合考察の概要が述べられたあと、第2節で本研究の調査方法・分析方法について、第3節で箱庭制作面接における促進機能について、第4節で継続的な箱庭制作面接における連続性に関して、それぞれⅨ章までに得られた知見を整理して考察が行われている。調査方法・分析方法については、継続的な箱庭制作面接から得られた質的データを、第1研究(M-GTA)と第2研究(質的研究による系列的理解)の2方向からの分析した本研究での方法が、方法論的には「方法のトライアングレーション」と位置づけられ、両方法が有する限界を補い合うことで、より精緻で豊かな内容をもつ質的研究を行うことが可能になったと考察されている。また、第2研究の方法は、「単一事例質的研究」と命名され、より精緻な質的データに基づく事例研究法として独自の方法となり得ることが提起されている。箱庭制作面接における促進機能については、第Ⅴ章から第Ⅷ章の考察を総合し、1)装置や構成による内的プロセスの喚起、2)装置や構成への内的プロセスの付与、3)自律性や多義性などのイメージ特性、4)意識の図と地、図地反転による気づき、5)ミニチュア・ミニチュア選択・構成の他の構成との関連、6)直観的な意識、7)連続性による促進が、箱庭制作面接の包括的な促進機能であることが示された。箱庭制作面接の連続性に関しては、第1研究のM-GTAによる機能面からの分析と第2研究の単一事例質的研究による内容面からの分析を併用することで、多面的・総合的な分析が可能になったと論じられている。

第XⅢ章の第5節には、残された課題として、M-GTAで得られた促進要因の『交流』のうち、本論文で焦点を当てることができたのは5つのコアカテゴリーのみであり、7つのコアカテゴリーの詳細な検討がなされていないこと、また、本研究が心理的に健康な2名の調査参加者のデータのみに基づいた研究であり、臨床事例にどの程度応用できるかの検討は、本論文に示した知見の【応用者】による評価を待つ必要があることが挙げられた。

〔2〕審査結果の要旨

本論文は、箱庭制作過程における制作者の主観的体験に着目して、箱庭療法が心理治療的に働く機序を解明しようとする先行研究において残されてきた課題を乗り越えるべく、可能な限り要因の統制を行わず、臨床場面における箱庭療法に近い形で継続的な箱庭制作面接を行って、そこに働く治療的要因を記述・分析しようとした点で評価すべき研究であると言える。本研究の調査協力者(箱庭制作者)は2名のみであるが、2名が、箱庭制作面接(箱庭制作過程・自発的説明過程・調査的説明過程)とVTRに基づく内省報告の作成およびふりかえり面接を、回数にして8回～10回繰り返し、また期間にするとそれぞれ約1年にわたってデータを提供し続けており、本研究で分析対象となった質的データの豊富さは、これまでに発表されている箱庭療法の基礎研究と比べても、類を見ないものとなっている。この豊かなデータを分析資料として、第1研究では、「継続的な箱庭制作面接における促進機能」、つまり継続的な箱庭制作の何がどのように箱庭制作者の自己理解・自己成長を促進するのかをテーマに、M-GTAによるデータに密着した分析から、箱庭制作面接の促進機能は個々の促進要因間の『交流』においてこそ機能することを、概念生成の根

拠となった膨大な数の具体例を丁寧に提示しながら論じており、特に、箱庭療法に特有のミニチュア玩具や砂箱という物理的な「モノ」を使用して何らかの表現を行っていくことが、箱庭制作者にとってさまざまな「気づき」を生む心理的な出来事として体験されていく様子を制作者の語りに基づき「内界」と「装置」と「構成」の『交流』としてつぶさに描出した点が意義深いと言えよう。

また、第2研究の「単一事例質的研究」は、箱庭療法におけるオーソドックスな臨床事例研究のスタイルを踏襲しながら、臨床事例研究では得ることの難しい、箱庭制作者の主観的体験の詳細な語りをベースにすることで、継続的な箱庭制作面接の展開において、制作者が自身の変容をどのように体験し、語るのかを濃やかに明らかにした点にオリジナリティがある。加えて、同一のデータに対し、横断的アプローチ（第1研究）と縦断的アプローチ（第2研究）を併用することで、それぞれ強調点の異なる分析結果を示すことが可能となっており、各アプローチが有する限界を互いに補い合う工夫がなされている点も本論文の成果として高く評価できる。

しかし、一方で、圧倒的な分量をもつデータを収集したがゆえに、本論文に示された論考のみでは、本研究で得られたデータが十分に分析され尽くしていないことも指摘しなければならない。このことは、第1研究で描かれた「箱庭制作面接の促進要因間の交流」のモデル図に、「箱庭制作面接の促進機能」として12のコアカテゴリーが示されているが、本論文では5つのコアカテゴリーのみが論じられたに過ぎない点に、端的に表れている。口頭試問においても、とりわけ、箱庭療法が治療的に機能する上で不可欠な存在となる「セラピスト（見守り手）」が、継続的な箱庭制作面接においてどのように機能したのか、主題的に論じる必要があるのではないかという点が指摘された。またそのことと関連して、第1研究、第2研究ともに、見守り手としてその場に臨在した著者自身が、A氏、B氏に、またA氏、B氏の箱庭表現に、どのように主体的に関与していたのか、論文中には殆ど記述されていない。これは、学術的研究として、著者自身の主観的な思いや考えを可能な限り分析の対象から外し、箱庭制作者のA氏とB氏の語りを客観的に記述・整理することに重きを置いたことからくるものではあるが、箱庭療法の臨床実践においては、セラピストの主体的関与が、クライアントの変容過程に極めて重要な役割を果たしていると考えられ、本論文で明らかになった知見が、臨床実践においてどの程度妥当性をもち、また有用性を持つのかという検証は、今後臨床実践の中で評価されなければならないことが議論された。

このような不十分な点も指摘できるが、制作者の実際の語りを丁寧に収集して、箱庭療法が心理治療的に働く機序について、逐一根拠を示す努力をしながら論じた点は、高く評価でき、また上述のように、箱庭療法研究の方法論としても新規性を有しており、こうした方法による更なる分析を重ねることで、箱庭療法の治療機序に関する実証的な知見を着実に展開していくことが可能であろう発展性も踏まえ、課程博士の学位請求論文としては十分に評価できる。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断する。